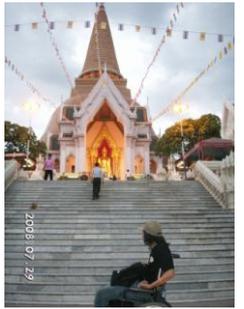


留学・研究計画書

氏名 吉村 千恵	留学機関名 マヒドン大学 : Mahidol University
留学先国名 タイ	留学期間 西暦 2007 年 5 月 ~ 2009 年 4 月
研究テーマ タイ社会における障害者とその生活変容	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>1, 研究目的</p> <p>本研究の大きな目的は、タイ社会の歴史や文化、政策の中で「障害を持つ」ことの意味及び障害者の生活の変遷はどのようなものであったかということを明らかにすることである。</p> <p>一般的にタイにおける障害者というと、医療的側面やリハビリテーション、近年では開発の側面に重点をおいて語られることが多い。しかし、それらの場面では、援助国側による障害者像が語られ、文化的社会的背景を含んだタイの文脈で障害者像が語られることはほとんどなかった。</p> <p>しかしながら、障害者である前に一人のタイ人である彼らの選択や決定、または喜びや満足なども、タイ社会のもつ規範や概念によって規定される。一方、タイの障害者への差別についての説明は「仏教思想の輪廻転生による差別が根強い」という一言で説明される場合が多いが、タイ研究において宗教を仏教一色で語ることも、障害者問題を宗教のみで説明することも出来ない。</p> <p>それでは、タイの地域の中で障害者がどのような存在であったかということ、かなり詳細に行われてきたこれまでのタイ地域研究のなかでも障害者に関する言及は皆無に等しい。障害者は地域の歴史の一構成員であったにもかかわらず、障害者に焦点をあてた研究などは行われていない。</p> <p>現在、これまでの障害者の社会活動及び彼らの障害概念の変容を政策・制度、また NGO を含む国際機関からの影響も含めて明らかにすること、基礎調査実施による概観の把握を目的として博士予備論文を執筆中である。その後博士論文執筆過程においては、障害者の生活実態の変容及び障害者を取り巻く概念や社会環境などを、障害当事者のみならず家族やコミュニティへの臨地調査を基本とし、より詳細に明らかにする。</p> <p>2, 研究の意義</p> <p>①タイ研究について</p> <p>「障害者とは何か」という定義や、差別及び統合の在り方は各国・各地域、各時代によって異なる。「障害者」は社会によって創られる側面を持つ。従って障害者への社会のまなざしを追うことは、その社会をまた別の角度からみることでもある。タイ社会も、独自の障害の定義を形成しながら社会を構成してきたのではないかと仮定している。「障害者」という、社会の中に必ず存在するにもかかわらず周辺に置かれがちな人々を追うことで、恐れや忌避の対象を創り出す社会の側面が明らかになり、タイ社会の新たな一面を見ることに貢献できると考えている。</p> <p>②障害者研究について</p> <p>タイ社会においても、障害者というと哀れみや慈悲の対象になりがちである。しかし、実際の障害当事者や彼らを取り巻く人々にとっては必ずしも哀れみのみで生きているわけではないのではないかとというのが本研究の出発点でもある。障害者の生きてきた歴史は長い。タイ社会における障害認識や生活実態を追うことで、新たな障害者像の研究に貢献できるものと考えている。同時に今後の障害者をめぐる動向に関する研究を続けるうえでの基本研究とすることができる。</p> <p>上記タイ地域研究と障害者研究の両方が一体となり、また相互に照らし合うことでより有意義な研究となる。また、本研究は、アジア各国の障害者への注目が集まりつつあるなか、より現地の視点にたったアジア障害者との協力関係を築く際の一助となるものと思われる。</p>	

成果報告書

記入日 2010年 3月 10 日

氏名 吉村千恵	留学先国名 タイ王国	所属機関 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
研究テーマ：タイ社会における「障害者」とその生活変容		
留学期間：2007年 8月～2010年 1月		
<p>1. 現地での調査基盤と生活</p> <p>タイ国内での所属機関は、最初の一年間がマヒドン大学大学院地域開発にむけた言語と文化研究科に、後半はタマサート大学大学院社会学及び人類学研究科にそれぞれ訪問研究員として籍を置き、資料収集を行った。また、セミナーや研究会参加を通じて、研究者との交流も図り貴重なネットワークを構築することができた。</p> <p>同時に、タイ到着後約半年間は、バンコクにてタイ語能力向上のため、語学学校へ通い、必要なタイ語読解、コミュニケーション能力向上を図った。また、タイ語手話の獲得のため調査中2年間定期的に聾学校へ通った。</p> <p>調査は、中部タイに位置するナコンパトム県（バンコクから北西約56キロ）を中心に、必要に応じて国境周辺も含めた地方へ出かけながら行った。ナコンパトム県では、県庁所在地であるナコンパトム市にある障害者のセルフヘルプグループが借りているタウンハウス（コンクリート建築長屋形式の2階建て集合住宅）の2階で暮らし、障害者との同居や活動への参加を通じた参与観察を行った。また地域内の障害を持たない人々の生活を知るため、後半の6ヶ月間は、同家屋の近くにある民家でホームステイを行った。</p> <p>当然ながら調査対象者のほとんどは当事者だった。日本での10年以上にわたる介助経験があったこともあり、特に重度障害者とは、日常の介助実践や活動参加、その他様々な機会を通じてコミュニケーションを図ることが出来た。</p> <p>調査の大半を占めた障害者たちとの同居生活は、貴重な体験となった。楽しいと同時に介助が重なり疲れたり、議論を交わしたり、インタビュー途中で話を聞きながらともに泣いたり、調査者や障害者という立場ではなく、人間同士としての感情がぶつかるような泣き笑いの時も多かった。結果的に、地域内障害者訪問や介助を実践するなかで、より深い参与観察を行うことができた。</p>		
		 <p>タイで最古のナコンパトムジェーディー寺院</p>
<p>2. 調査概要</p> <p>〈目的〉調査の目的は、主に以下の3点である。</p> <p>① 地域内で暮らすタイの障害者の生活実践を明らかにすること。</p> <p>障害者の生活は、実に多様である。彼らの家族形態や生業などはもちろんのこと、障害者たちは様々な場面で地域社会の中での人間関係などを活用しながら生きている。彼らの諸実践を明らかにする。</p> <p>② タイ社会の中で障害者がどのような社会関係を築きながら位置づけられているのかを明らかにすること。</p> <p>障害者の社会的立場やメディアも含めた障害者像の形成と、障害者自身が自らをどのように捉えているの</p>		

か、など様々な視点から「障害者イメージ」を明らかにする。タイにおいても、日本や他の国や文化と同様に、障害者を憐憫や無能力の存在として見る視点は存在する。しかし、障害者の個別の生活実践に視点を移すと必ずしも上述のイメージばかりではない。それでは、各生活の場や地域の中では、「障害者」はどのような存在として語られるのかを明らかにする。

③ それらを裏付けする資料や基礎的データの収集を行うこと。

〈調査日程〉

2007年8月～2008年3月 主にバンコクにて生活基盤の整備、資料収集、関係者挨拶、語学学校、手話講習会、セミナー参加などを行う。

2008年4月～2009年12月 主にナコンパトムを基盤に調査実施。ナコンパトム県滞在中必要に応じて、バンコク特別県、ノンタブリー県、チョンブリー県、ウボンターニー県、チェンマイ県、サムットプラカン県、の在宅障害者や障害者関係施設の訪問や資料収集も行った。

2010年1月 帰国に向けた最終資料収集や関係者への挨拶などを行った。



ろうの牧師にインタビュー中

3. 調査成果

① 調査地概要

タイは、東南アジア大陸のほぼ中央に位置し、現在新興工業経済国の一つに数えられる国である。また、首都バンコクには、国際機関やNGOの事務所が多数あり、様々な開発計画も行われてきた。中部タイを中心とした大きな経済社会的変容は、そのまま人々の生活スタイルの変容でもある。主な調査地であるナコンパトムは、バンコクに近く、大きな幹線道路もあるため、郡によってはバンコクまで通勤することも可能であり、また外資系やタイ系企業の工場なども多いため、同県の主要産業は農業となっているが、実際には、家族内の誰かが工場労働者として、または会社員として働いている家庭も多い。従って、住民の生活もバンコク首都圏の影響を受けやすく、バンコクを中心とした社会変容にあわせて、住民の生活の変容も大きいと言える。

② タイの障害者を巡る制度的背景

1991年にタイで初めての障害者法である「障害者リハビリテーション法」が成立した。それ以前は、傷痍軍人や国家公務員などの限られた社会的立場の障害者へのサービス規定があるだけだった。さらにそれ以前の1940年代には、バンコク市内で物乞いをする障害者を取り締まり、收容する「乞食統制法」があり、障害者は取り締まりの対象だった。

1991年のリハビリテーション法を元に制定された施行規則によって、障害者手帳の取得、車いす等福祉機器の一部無料化、リハビリテーションサービスの利用、法定障害者雇用率制定など、90年代には、いくつかの基本的なサービスが制定・実施された。その後、国民皆保険を目指した医療制度によって、障害者手帳を保持していると、公的医療機関での基本的医療が無料で受けられるようになったり、月々500バーツ（約1,500円）の障害者手当が受給できるようになるなど、日常生活の中にも影響を与える制度が確立されている。2007年には、上法律の見直しの結果として、「障害者の生活の質の向上法」が新法として制定され、障害者の市民権や介助者派遣サービスなど、近代的な内容も明記されている。また、建物バリアフリー法や教育基本法改正による障害児教育の整備などによる社会的基盤整備も進みつつあり、現在のタイの障害者は、そのような法的整備の大きな変容の影響を随所で受けていることが明らかになった。さらに、2007年の新法の施行規則や介助者派遣制度は現在整備中である。数年以内には、施行させると思われるため、今後も引き続き注目したい。

③ 国連やNGO、障害者運動そして地域内ピア・グループ活動

バンコクには、国連 ESCAP（アジア・太平洋経済社会委員会）の事務所があり、そのほかの国際機関も事務所を構えている。加えて、様々なテーマで活動を展開しているNGOもタイに事務所を持ち活動を展開している。障害者関係で活動を行っているNGOも多数あり、車いすや義手・義足などの福祉機器関係、障害児教育支援、リハビリテーション関係、職業訓練関係そして障害者運動支援など多様である。それらのNGOは、世界中の国からきているが、特に日本からのサポートが際だっているといえる。

興味深いのは、障害者運動や当事者活動支援である。国際的なネットワークが盛んに構築されてきた1990年代後半より、外国の（特に日本からの）障害者が、タイの障害者を直接支援している。タイの障害者の立場からは、



障害者手帳

同じ障害を持つ仲間からの支援は、何より安心出来るものであり、エンパワーされる。日本の障害者たちが獲得してきた、バリアフリー設備や諸制度、統合教育や地域内就労の実現などの情報について日本語や英語が出来ない障害者たちも情報を収集しているため、インタビューに行った私に対して逆に質問されることも多々あった。「日本だから出来るのだと思う一方、同じ障害者に出来て自分たちに出来ないはずはない。」とタイの障害者たちは異口同音に言う。

障害当事者による、運動の展開の結果、バンコク市内の地下鉄建設の際や施行規則作成など様々な公的委員会のメンバーに障害当事者が任命され発言することが可能になっている。また、それら運動の影響を受け、バンコクを中心とした障害者リーダーの影響を受けた障害者たちは、各地域内で活動を開始している。調査地のナコンパトム県でも、重度障害者たちが、地域内で暮らす障害者を訪問し、法律や制度の案内を通じた権利擁護活動や、障害者を持っているためなかなか外に出られなかったり、自身を価値がない存在だと思っている障害者に対して、同じ障害者を持った仲間としての「ピア・カウンセリング」を行ったりしている。

④ 地域内で暮らす障害者たち

それでは、地域内で暮らす障害者はどのような生活実践を行っているのか、上述した背景との関係も踏まえて二人の障害者のケースを報告したい。

【ダオ（仮名）さん：52歳女性 ポリオの後遺症による右下肢発育障害と麻痺及び右手に軽度の麻痺】

4歳の時、ポリオにかかり、障害が残った。22歳で結婚し、一女一男を出産するが、数年後夫が別の女性と他県へ移住し、その後3年前まで子ども二人と両親、妹の6人で暮らしていた。実家の生業は農業だが、農地が少ないため、本人や両親、妹は、地域内雑業や日雇い労働などで現金収入を得ていた。

3年前、障害者活動を通じて知り合った盲人のオー（仮名）と結婚し、現在は実家の隣の郡にある別の村で暮らしている。

ダオが、障害者登録を行ったのは、3年前で地域行政区（タンボン）の職員が紹介してくれたためである。また、その登録に関する情報の説明会（障害者リーダーがタンボン職員と協力して行っている、ピアサポート活動の一つ）に参加した時に障害者運動の活動を知り、関わるようになった。

現在は、夫の家で、夫の甥とともに生活しており、夫のラジオDJの仕事を手伝っている。夫のオーとダオは、一台の車を協力して運転しながらラジオ局へ行く。オーは目が見えず、ダオは右足に障害があるため、マニュアル車を運転するためには二人いないと運転できない。つまり、ダオがブレーキを強く踏むことが出来ないため、ダオの合図によってオーがハンドブレーキでスピードを落としていく、という具合になる。

また、村内集落、特に家の周辺は、オーも運転するが、今度は助手席に座ったダオが案内をしながら運転をするという具合になり、生活すべてが協力しあっているのだが、運転も「二人いないと運転できない」と笑う。

二人の生計は、オーの財産である水牛を飼い、DJの仕事をして、障害者手当を二人分受給する。しかしそれだけでは不十分なため、さらに二人は、“人的資源”とも呼べるネットワークを活用してその不足分を補っている。

例えば、オーの仕事は、2カ所のコミュニティラジオ局でDJをすることであるが、その移動の合間に昼食をとる必要がある。その際、二人ともう一人のDJ仲間（身体障害者）と3人で、「友人」に会いに行く。「友人」とは、クウィットティアオと呼ばれる麺の食堂を営んでいる男性であり、彼の親切心により食事の代金は不要となる。また、仕事がない日や仕事の前後には、地域内の寺院へ行く。寺院には、僧侶が托鉢によって得たその日の食事があり、僧侶が食べた残りがおいてある。食事や飲み物、デザートに至るまで、「功德を積む」と言いながらいただく。帰る前には、ダオは自宅用にフルーツやお菓子をいただき、オーは一人で弟である僧侶の部屋に行き、たばこを数箱もってきて、おいしそうにたばこをくゆらせる。

一見、二人は周囲の障害者への親切心を利用して「たかり」をしているようである。しかし、注意深く見ていると、行った先々でオーは頼まれれば車やトラクターの修理などを行い、ダオは片付けなどを行う。また、別の食堂では、食堂のオーナーの親戚の子に障害があるため、そのオーナーへ障害者登録や性能の良い車いす手配のことなどの相談に乗っている。

二人が障害者運動に参加するのは、地域内の障害者支援をしたいからである。しかし、同時に実践を重ねた結果、二人がその実践から得る情報や運動を通じて提供出来る福祉機器など、さらにオーが生業として獲得している修理の技術など、不可視の「資源」が現金収入には結びつかないが「助け合い」という相互扶助関係を生み出し、結果的に二人の生活をさせることにつながっている。

ダオは、障害者であることで困ったことは少ないと言う。しかし、実際には子ども時代には障害が故にからかわれたり、条件の良い職業に就けなかったり、実際に肉体労働は出来ないと思なされるため工場など、定期的な収入を得られる場にも就労することが難しいなど、そのときそのときには困難に直面してきている。しかし、それでもダオが「障害のせいで困ったことは少ない」という背景には、困難に対して「慣れ」ざるを得なかったことだけではなく、上述のような「助け合い」を活用し、各場面において困難をしのぐことが出来たためではないかと思われる。

空き時間には、地域内の障害者宅を訪問するというのも日課としている、彼らの生活実践を通じて見えてきたのは、「障害」というスティグマを逆に「活用」しながら生きる姿と同時に、障害者のグループ活動によって得られた障害者にとって有益な情報などを自身の生活の場で確実に地域内の障害者へ還元するという、障害者が障害者



であるが故に可能となるひとつの「つなぎ役」を担う人々の姿だった。

【ユウタ（仮名）さん：23歳 男性 小児脳性麻痺】

障害者には、障害者のネットワークがある。特に障害者によるセルフヘルプ活動をしている人たちは、農村に出かけた時に会った障害者に声をかけたり、情報交換したり、時には我が家の障害者をなんとかして欲しいという相談が持ちかけられたりする。

脳性麻痺のため四肢運動機能麻痺と言語障害やあるユウタ（23歳男性）もまた、障害者リーダーに声をかけられ、19歳で初めて家の外で時間を過ごすことを知った一人である。それまでユウタにとって、社会とのつながりは、父親とテレビだった。

初めてセンターに来た頃のユウタは、医者から知的障害もあると言われていた。ユウタにとって新しく出会う人たちの話は良く理解出来なかった。質問の内容も良く理解出来ないため受け答えもぼんやりとしか出来ず、医者からの「知的障害も」という判断をもらうことになったと思われる。

ユウタは、この地域で生まれ、4歳まで両親と一緒に住んでいたが、両親の別居に伴い母親と隣の郡に移った。その後13歳の時に母親が亡くなり、父親との同居が始まった。しかし、13歳になって、突然大きくなった息子の介助に父親は戸惑い、同時にユウタの話し言葉もよく理解出来なかったため、ユウタが17歳になるぐらいまでコミュニケーションらしいコミュニケーションがとれていなかった。ユウタは、外に出て何かすることが夢だったが、父親にしてみればそれは面倒が増えることであり、出来ないと思っていた。また、新しい妻を迎えたことも関係してユウタが外で何かをすることは反対であった。

そのようなユウタにとって、10代はストレスの多い時代だった。そんな時に障害者リーダーたちに誘われて外に出るようになった。

筆者と初めて会ったのは、ちょうどその時で、彼が19歳の時である。彼は父親への不満を募らせており「家を出たい」との思いが強く、地域での自立生活をかかげる障害者運動のコンセプトは彼にとって、「信じられないけど、信じてみたいもの」だった。

自立生活運動の一つに障害者による障害者のためのカウンセリングがある。これは、障害当事者だからこそわかり合えるというピアの概念を基本に、自己肯定と自立のための具体的な支援を行う活動で、「障害」を持っているが故に受けた苦痛なども分かち合えるという安心感がある。ユウタは、このカウンセリングやそれ以外の活動に参加するにつれて、近所のレックさん曰く、「まるで別人のようになった」。レックさんは、ユウタが子どもの頃から近所付き合いをしていた雑貨店の店主で、「以前は、何を話しているのか全く分からなかったが、今は言葉が明瞭になって聞き取りやすくなった。格好も汚かったが、今は、おしゃれして、ブーツまではいている。顔の表情も生き生きしていて明るくなった。」とユウタの変化に驚いている。

ユウタは、重度の障害があるため、小学校へ行くことが出来なかったが、20歳の半ばから、地域内のお寺で開催されている成人学校へ通い、タイ文字を勉強した。同時にセンターでパソコンを練習し、23歳の現在は、チャットを使い恋人たちとの会話を楽しんでいる。

最近では、ユウタにも「弟分」が出来たし、新顔のメンバーも増えて、他の障害者へのリーダー的役割も果たすようになった。また、バンコクで開かれる会議などでも、障害当事者としての発言を積極的に行い、他の障害者からも一目置かれる存在になってきている。

ガイ（34歳女性）は、4歳の時の交通事故が原因で、脊髄を損傷し下肢不随のため車いすに乗っている。母親との二人暮らしで、家の中で母親の帰りを待つ毎日だったが、ユウタ達の一行が北タイの農村を訪れた際にタンボン行政区の職員の紹介で彼らに出会い、「新しい生活をしてみたい」と思い、そのままN県に引っ越してきた。

ガイにとって、母親と離れることも、障害者運動との出会いも全て新しい出来事であり、自分のお小遣いで市場で買い物をするのも楽しいことだった。しかし、それまでずっと母親と一緒に生活してきたため、日常動作機能は高いものの、自分で生活設計をたてた経験がないため、障害の有無とはあまり関係のない生活問題が色々起きた。また、「自分の部屋にいと誰とも話ができない」ため、寂しくて母親に毎日電話をかけたり買い物をしたりするなど、金銭的な問題も発生した。さらに、以前からあった褥瘡が悪化した。

ガイにとって、新しい生活は楽しくもあり、ストレスも多いものだった。そこで、ユウタたちがカウンセリングを頻繁に行い、様々な相談に乗った。

また、ユウタは、ある会議の中で、あるリーダー格の支援者が、知的障害者が恋愛・結婚・子育てをすることに「自分で何もできないくせに、まわりのお荷物になるだけだから絶対に認められない」との発言に対して、「自分には知的障害を持つ友人もいる。自分も重度の障害を持っている。彼らと一緒にご飯を食べたり、活動したりすることはとても楽しいし、とても助けてもらっている。障害は助けてもらえば良い。知的障害者が安心して暮らせるサポートがあれば、別に結婚して子どもを産んでも良いと思う。そのようなサポートがどうやったら出来るか考えるのが僕たちの仕事だと思っている。タイがそういう社会になることを望みます。」と、手を挙げて発言し、他の聴衆から拍手をもらうという場面もあった。

ユウタのような重度障害者は、地域内に確実に存在している。多くの重度障害者は、家族と暮らしているため、



初めて地域の障害者の前で自分の経験を話す日。照れくさい笑顔。（左から二人目）



ガイの相談にのるユウタ

衣食住には大きな問題を抱えていない。しかし、自身の障害がゆえに外へでかけられない、学校へ行けない、という社会参加の問題や情報不足から、自分は何の価値もなく、また何かが出来るとは思っていないケースも多い。「一生この部屋で暮らすとと思っていた」という障害者が多いのである。

そのような重度障害者にとって、ユウタのような重度障害者が、リーダーとして活動をしているのを目の当たりにするのは、「自分にも何か出来るかもしれない」「彼に出来るのに、自分に出来ないわけがない」という希望につながっている。

また、障害を持っているがゆえに「学校へ行けない」、「建物に入れない」、「物乞い扱いされる」、「子どもにまねされる」、「見えない壁を感じる」という思いを持ってきた障害者にとって、同じ障害者とそのような想いを話して事が出来るのは、それだけで「心が軽くなる思いがする」「障害者だからといってバカにされない」などの安心感がある。

障害者が他の障害者に身体的介助を行うことは難しい。しかし、仲間として情報共有や悩み相談、安心感のよりどころとして地域生活を豊かにするサポートをすることも、大切な地域ケアの一つだと思われる。

彼らの生活実践を通じて明らかになったのは、限りある資源や公的制度の狭間で、障害者を持つ仲間同士だからこそ出来るサポートの意味と、変容する社会制度や外国から入ってくる新しい情報を積極的に取り入れ自らの地域活動に生かそうと努力する重度障害者リーダーたちの姿だった。しかし、その背景には彼らが活動できるだけの医療制度やパソコンを含めた道具、そして人々の意識も近代化しているということも見逃せないだろう。

⑤ 「障害」を持って生きるタイの人々（まとめにかえて）

既述のように、障害者の地域内生活実践は多様である。それは障害の種別や形態が多様であるということとも関係があるが、障害者または障害者の家族の属する社会的立場や、障害を持った経緯などにおける社会経験との深い関わりがある。タイの障害者は、宝くじ売りや電気修理などを生業とする場合も多いが、そのほかは家業やどの情報に依拠するか、どのような友人知人がいるかなどによって就業の内容は大きく異なる。結論としては、障害者の種別ではなく、上記就業背景に至るまでにどのような社会グループに属しているかと言う点も大きく影響する。

また、タイの障害者のもつ背景としては、かつてのコミュニティの形態と近代化する生活変容が入り交じる現在において、さらに福祉制度が整う前夜の状況ということがあげられる。また、医療技術の発展などから、重度障害者が増加している一方、生活習慣や教育制度の変容、労働形態の変容などからこれまで障害者介護の担い手であった家族の状況も変化しており、重度障害者の介助を長期的に担うことが難しくなるケースも増加している。そのような重度障害者の介助者不足の場合、現在は近隣諸国や地方出身者が住み込みで介助者になるケースもバンコクを中心に増えている。

重度障害者は、その多くが寝たきりに近く、一日の大半を家族または介助者とのコミュニケーションを中心に生きている。また重度心身障害児も増加する中、これまでのように地域内サポートのみで一生を過ごすことには限界が出てくると思われる。

一方で、障害者の多くは、上述のダオやオー夫妻の様に、地域内資源を活用して生計を立てている軽度障害者たちがほとんどである。調査の結果、地域の人々が障害者を果たして平等な存在として、憐憫や同情なしで扱っているかといえば間違いとなる。

それでも、障害者たちのなかには、家族を中心としたサポートを日常的に得ながら、地域内資源を活用するために積極的に地域の人々とコミュニケーションを図る人々がいる。障害者にとって、地域の人々との関わりがたとえ同情心をスタートにしたものであっても、日常的な関わりの中からは有機的なつながりを重ねることで、一役割を担う存在として認知されることの方が重要である、と考えるケースが多いと感じた。

そんな彼らにとっては、権利をかざして戦うよりも、日々の交渉によって少しずつ自分にとって有利なものを引き出すことが重要であるようだ。まさに、障害者が地域内でより豊かに生きるためには、交渉能力が求められると言っても過言ではないだろう。ただし、交渉が得意ではない障害者本人にとっては、障害が故に人生の課題が増えたとも言え、「気が重い」と、地域の人々に気兼ねして外出を控える障害者もいる。

福祉制度が本格的に充実する前の状態である現在、障害者リーダーたちは、タイ社会で暮らす障害者にとってより良い社会のありようを模索している。その選択肢の中には、日本の福祉制度を参考にしようというものも少なくない。しかし、重度化する障害者と地域内で暮らす軽度障害者、それぞれのニーズは異なり、一つの制度でどこまで担えるのかは不明である。障害者による障害者サポートが展開されようとしている現在、障害者が地域の中で出会ったより多くのニーズを抱える障害者の情報をどのように運動に生かし、政策につなげようとしているのかは今後の課題として調査を継続したい。

社会変容過程にあるタイ、福祉制度の充実を図ろうとするタイ、現在報道されているように市民の動きが続くタイ、市民権や民主化についての認知が知識人を中心に拡大しつつあるタイ、外国からの情報や支援とタイ国内の障害者リーダーたちの交流が拡大しているタイ、医療技術の拡大とともに増加するタイの重度障害者たち、タイ社会の中での障害者の描き方も時代に合わせて変容している。調査中、2つのテレビ局によって週4回、障害者の生活を紹介する番組が放送されていた。一つはテレビ局によるもの、もう一つは障害者が枠をもらい自分たちで企画するものだったが、いずれもドキュメンタリー形式だった。テレビ局による番組は、生活困難にある障害者か、困難を乗り越えて「頑張る」障害者かのどちらかを紹介するもので、番組の最後には寄付の送金先口座が登場する。障害者による企画は、もう少し多様で、文化的に活躍する障害者や企業で働く障害者に焦点をあてた回も多かった。いずれも、障害者がテレビ番組の定期的なネタになるという点では興味深い。また、健康保険局の外郭団体による自動車事故防止キャンペーンの際に、「スピードを出しすぎると障害者になる」という絵図を国内あちこちに貼り

だしていた。そこでは障害者は、スピード運転をたしなめるための「おいとし」として使われていた。一方で、近年のタイ社会の近代化にあわせて、企業内で働く障害者や、障害者スポーツの選手など社会的に成功していると思われる人々も登場している。彼らについての表現は「障害があるけど、〇〇が上手」「障害を克服してすばらしい」という評価が付き、さらに「大学教員」や「部長」「社長」「通訳」などの肩書きが付けば、障害者としてではなく社会的地位がある人として、敬意を払った対応を得るようになる。

さらに、近年、新しくできる建物はバリアフリー配慮がなされるようになってきた。特に地方では、障害者よりも高齢者の利用が目立つが、誰もが使いやすいデザインになっている証拠だと言える。例えば大きめのスーパーマーケットであれば、地方でも障害者用スロープやトイレが設置されていたり、ガソリンスタンドにも障害者トイレが設置されていたりする。バンコクの新しい建物では、障害者マークが味気ない統一されたものではなくて、車いすをこいでいるスポーティな図柄になっていたり、着色してかわいくしているものもある。さらにアクセサリ売り場では、平和のシンボルやクロスデザインと同じように車いすマークのアクセサリが売られていたりするなど、社会的メッセージを若干含んだかわいいデザインだと見られているようだ。

以上のように、障害者に対するイメージは、以前に比べて多様になってきていると思われる。時には否定的で障害者が外へ出ることを躊躇することもある一方、車いすで颯爽と動く障害者に対しては「おしゃれ」というイメージもあるようだ。

私の滞在中のタイ社会は、デモ隊による空港閉鎖などが起きるなど、まさに変化を遂げようとする時であった。障害者を取り巻く環境も、現在変化の過程にあると言える。

自らの置かれた環境の中で、障害を持ち生きている障害者たちは、時には社会的レッテルをも武器にしてより良い生活を求める人々であり、時には障害者運動と出会い自己否定に陥っていた生活から他の障害者をサポートすることで自己実現を見だしていく人々であったりとタイ社会と同様、新しい時代に向かって変容しつつある姿だった。

4. 今後の課題

本調査では、長期フィールド滞在型調査を実施することが可能であったため、通常では得られない貴重なデータや調査対象や地域の人々との貴重な信頼関係を築くことが出来た。また、調査を進めていく中で、タイミングに合わせて必要な資料を収集することも出来た。しかし、データ量が多かったために、調査期間中に十分な整理を行うことが出来なかった。

逆に、自らのタイ語や手話能力の限界も感じ、データ収集に時間を要する場面もあった。そのような言語能力の問題や、障害者の社会的状況など様々な理由から、調査対象者は身体障害者が多く、精神障害者が少ないという、実際の障害者種別バランスとは異なる調査対象者構成となってしまった。従って、今後の課題としては、早急に収集データの整理、収集資料の熟読を行い、精神障害者や知的障害者に重点をおいた補足調査を論文執筆に向けた計画に盛り込む必要がある。

既述のように、タイ社会も、障害者に関する動きも現在変容の途中にある。これまでの調査を踏まえ、今後障害者たちがどのような選択をし、行動するのか、地域で暮らす障害者たちの生活はどのように変化するのか、など継続して調査を行う必要がある。彼らの動向は、時にはタイ社会の動向そのものであることもあり、逆に彼らからタイ社会に影響を与える動向となることも考えられる。今後も本調査で得られたデータを元に、さらなる調査の発展を目指したい。

5. 最後に

長期調査を実施することが出来たのは、ひとえに貴財団による支援をいただいたおかげである。この2年間は、私にとって本当に多くの学びを与えてくれたし、かけがえのない友人や家族も与えてくれた。約2年間同居していた障害者たちとは、泣き笑いを繰り返しながら信頼関係を築くことができたと思っている。時には調査に行ってみたら、家族に捨てられ食事や入浴、おむつ交換などが十分でない障害者に出会い、全ての予定を変更して、インタビューの代わりにただ掃除・洗濯・買い出し・水浴び介助などを行い帰ってきたこともある。また、一度目は全く話してくれなかったのに、何度も顔を出しているうちに話してくれるようになった方もいた。そのような調査を行うことが出来たのも、2年間という時間があつたからに他ならない。

タイに長期的に身を置いたからと言って、タイ人にはなれない。しかし、寝食を共にすることで共通の話題が増え、細かい説明が不要になる生活を積み重ねることで、その日限りのインタビューでは見えないものが感じられ、障害者たちも私を単なる客ではなく、一緒に過ごす者だと認識してくれたのではないと思う。実際に、貴重な証言を得たのは、インタビュー中ではなく、何気ない日々の一こまの中で発せられた言葉であったことが多かった。

私が彼らから学んだのは、単なる調査用データだけではなく、彼らを通じて、障害者が地域の中で生きていくことや「障害」を持ち生きていくこと、タイ社会のおおらかさと同時に厳しさ、などを知ることができた。さらに、障害を持つ葛藤や他の障害者のために働くことの意味など本当に多くのことを考えることが出来た。

タイでの2年間で糧に博士論文執筆にかかりたい。私が初めてタイの障害者と出会った1999年から現在に至る約10年間は、タイの障害者にとって、大きな変容があつた時期でもあつた。この大事な時期に貴財団に貴重な機会をいただけたことへの感謝は筆舌に尽くしがたい。長い間ご支援いただき、本当にありがとうございました。